

高退協学習会の報告

柳井卓先生
「満州引き揚げの思い出」

土居 修

今年度の高退協学習会は十一月二十四日(水)に高知城ホールで開催しました。講師は柳井卓先生でした。先生は音楽家としての名声が高いだけでなく、優れた平和主義者でもあります。今回は敗戦直前の奉天での生活、そして一九四六年の旧満州の人口島港からの引き揚げ体験を「満州引き揚げの思い出」として語っていただきました。参加された会員のみなさまは47名。肅々とした雰囲気の中で講演会でした。

戦争そして引き揚げの記憶が忘れられようとしている今日の状況を憂慮される柳井先生。だからこそこの体験を若い世代に語り継いでいきたいという強い信念に私自身も深く感銘を覚えました。あと一年で前期高齢者となる私でさえ戦争を知らない世代のひとりです。記憶が風化しているのではなく、私自身が未知であるからこそ息まわしい歴史に学ぶことを疎かにしてはならないと考えさせら

れました。ワイツゼッカー元ドイツ大統領が歴史を直視することを促した言葉、「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目になる」を思い浮かべながら先生のお話に聴き入った日をうれしく思い出しています。
注 以下の文章の「」部は、柳井卓先生の「忘れないう」(二〇〇四年の飛鳥出版室のかわら版vol.4)から借用しました。なお、「忘れないう」の全文は機関誌「こうたいきょう」第四十二号に掲載されています。

一九四四年十二月、「奉天の父を追って」「母子四人で」「激浪渦巻く玄界灘を渡る」「国民学校三年生(小学校三年生)」「だった柳井少年の憂悶」
奉天で空襲に見舞われたときの「私たち四人は押入れの中でひと抱き合ったまま、運を天に任せて恐怖に耐え」る絶望感。「会社から無事帰宅した父から」聞いた「爆撃のさなかに窓

思い出したくは無いけれど、戦争を決して忘れることはありません」と柳井先生

から首を出していた婦人が爆風でその首を吹き飛ばされ、また、「会社の玄関に止めてあった二頭立ての馬車の上手の馬の内臓が、下手の馬腹を貫いて飛び出していた」という凄惨さ。後日、自宅の屋上にある「ゴールタールを塗った亜鉛鉄板のそここにやじり状をした鋭い鉄片がブツブツと突き刺さっている」現状を確認したときの戦慄。「爆弾の破片です。こんなものが当たったならどんなことになるか……」身震いしました。
そして、「わずか一年半という奉天での劇的な生活の後、突如訪れた祖国への引き揚げ―苦難の脱出行」。食料は粗末なもので数多くの人間が下痢に悩まされていたという陰惨さ。検査も厳しく、誰か一人でも違反していれば全員が引き揚げ中止となる過酷な状況。遺体は連れて帰れず、布にくるんで水葬に付さなければならなかった冷酷さと苛虐さを垣間見た記憶。

高知城ホール二階の一室で、私は確かに先生が体験されたことをまるで自分が体験したかのように感じました。追体験とはこのよう
な感覚に陥ることなのかと納得したことを覚えています。けれども、報告のこの拙文を認めながら、柳井少年の体験に関わって憂悶・絶望・凄惨・戦慄・陰惨・冷酷・苛虐といったことが思い浮かんできたとき、パソコンを打つ手がとまりました。言いようのない怒りと悲しみが鋭い痛みをともなうて全身を駆け巡っていったからです。
ものかなしく、暗澹としたこれらのことばに通底する負の心情をわずかに十歳の少年が感受することがあつてよいのでしょうか。少年には夢多き未来を言祝ぐことばこそが相応しいはず。あらためて戦争という愚劣な行為に憤りを禁じ得ませんでした。
「思い出したくは無いけれど、痴呆にでもならない限り、戦争を決して忘れることはありませぬ」と語る柳井先生。家族や国民の運命を翻弄した「無謀な歴史」を語り継ぐことで「戦争をこの地球から永遠に排除したい」という思いを幾度となく繰り返されました。戦争を知らない私自身が戦争体験を語ることはできませんが、数多くの追体験をすることでその資格を有することができるとのだよと励まされたような気がします。また、



講師の柳井卓さん

後日の事務局会の総括では、柳井先生の願いを広く深く浸透させていくことを高退協の活動のひとつにしなればという趣旨の発言もありました。講演の後の交流会の出席者は柳井先生も含め、21名でした。開宴までの空き時間には柳井先生の美しいメロディが流され、また、宴の最中には女性会員が先生の曲を清らかに合唱して、和やかに花を添えています。出席された方は先生の体験の数々と願いをこころに強く刻み込んで、親睦を深めたのではないのでしょうか。閉宴まで歓談の花が枯れることはなく、感慨深い交流会であつたように感じます。最後にになりましたが、今回の講演会について、二度にわたつて時間の変更をお願いした経緯がありますが、そのたびに快く承諾して下さった柳井先生のお人柄のあたたかさの一端を紹介させていただきます。学習会の拙い報告とします。

生徒とのふれあい⑧

ストーブ設置運動

谷内純一



昭和37年、橋原高校に赴任して一年目の冬、期末試験で監督に行つたさい、寒さで手がかじかんで満足に字が書けず、たいへん驚きました。教室には八角形の大火鉢が置かれて、炭火が赤々と燃えていたのですが、それぐらいではとてもだめだったので。

赴任した年に担任した一年生にSくんがいました。明るく人柄でこんな話をしてくれたいことがあります。

「昨日、僕がバイクで走っていたら、前を走っているトラックがどうしても追い越させてくれません。土埃がもうもうとまきあがっています。どうして追い越させてくれないのかとじりじりしながら走っていて、チャンスがきたとき、一気に追い越して、追い越し際に運転手に向かって『馬鹿野郎と』とどなりました。そ

したら近所の人だったので、かつこ悪かった。」

彼は二年生のとき、生徒会長になり、教室に石炭ストーブを設置してほしいという運動をおこしました。PTAをまきこみ、県議会では橋原村在住の県議会議員も応援の弁を振るってくれました。猛運動の甲斐あつて、橋原高校と嶺北高校の二校にすぐに石炭ストーブが設置されたのです。おかげで私たち教職員も寒い冬を職員室で暖かく過ごすことができました。その後、石炭ストーブは仁淀高校など他の山間部の学校へも設置が拡大していったようです。すごい実行力でした。

Sくんは高校卒業後、父親の経営する建設会社にはいり兄の死後、彼が会社を受け継いで、発展させました。そして今も橋原町に在住しながら高知県の建設協会の副会長を務めています。

S君たちが卒業後52年たつて、彼らが70歳の時に初めての同窓会が橋原町で開かれました。そのさい同級生のKくんが披露したエピソードを紹介しましょう。

「生徒会長だったSくん」と執行委員だった僕の二人でM校長先生の官舎へ陳情にゆきました。そのときSくんは日本酒の一升瓶をもってゆきました。校長先生が紅茶を出して接待してくれました。Sくんが「校長先生、これにウイスキーをちょっと垂らすとおいしいんですよ。」と云うと、校長先生がサントリーの角瓶を持ってきてくれました。Sくんはウイスキーをドボドボといっぱい注ぎました。

Sくんはこの話をされて大変嫌がっていました。Sくんはその年、叙勲されて翌年一月の祝賀会には彼の人望でしよう、大勢の人が駆けつけました。



講師 柳井さん(写真上・下)



参加者のみなさん

お知らせ

高橋正さんより高退協へ『高知の近代文学さんば』5冊をいただきました。有難うございました。植木枝盛、崎坂紫蘭、大町桂月、大原富枝、宮尾登美子など諸氏の作品が論評されています。1部1,500円でお分けします。購入費は高退協の活動費にあてます。購入希望者は事務局(088-822-6822)へ連絡願います。

